

季報

二松学舎大学附属図書館
Quarterly Report

- P2 私と図書館 本多峰子
- P3 「広がる」特別な空間 ―私と図書館 原由来恵
- P4 二松学舎創立 145 周年記念企画展 大学資料展示室
- P5 竹清馬越文庫のデジタル化画像の利用について
- P6 ～ 7 田端文学散歩 ／ 作家のおやつ巡り⑤
- P8 本学教職員著書紹介

No.114

2022(令和4)年11月

私と図書館

国際政治経済学部国際政治経済学科 教授 本多 峰子

私が毎日学校の図書館に通うようになったのは、小学校の4年生の時でした。家の引っ越しのため、今まで通っていた区立の小学校に通うことができなくなり、その機会に私立に転校して毎日行き帰りに本が読めるようになったのがきっかけでした。『赤毛のアン』シリーズや、『長くつ下のピッピ』、ムーミンシリーズなど、借りてきては帰りの電車の中で読み始め、家に帰ってもやめられずに読み切っては次の日にまた図書館で新しい本を借りてきました。図書館には読んでも読んでもいくらでも楽しい本があり、学年が進むにしたがってまた異なる高学年向きの本がありましたから、飽きることはありませんでした。好きな本はくり返し借りてきて読みました。今でも大好きな『ナルニア国物語』シリーズも、最初の出会いは小学校の時です。7冊あって当時はまだ文庫本になっていませんでしたから、装丁本全巻では高価に思えて親に「買って」と言えず、毎年1回は1冊目から7冊目まで借りてきて読み返していました。昼休みなどには、図書館で大きな絵本のマザーグース（英国で昔から伝えられてきた子供向け童謡のような詩集です）を読んだり、司書の人と話をしたり（静粛なんて考えませんでした）、とにかく飽きることなく図書館で過ごしていました。

中学になっても図書館で過ごす時間の多い生活は続き、気がついたら図書委員長になっていました。図書委員は本の返却や他の生徒が申し込んだゼロックスコピーをとる仕事、本の修理などもやりましたから、放課後も図書館で過ごす時間が増えました。当時はゼロックスコピーなどは珍しくて、そんな仕事も楽しく、コピーの取り方まで上手になりました。他の中学で行われるいろいろな学校の合同図書委員会にも出席して、素晴らしい図書館もあるのだと感心したりもしました。

大学では、英米文学科の図書館で、日本では取り寄せしなくては買えない原書や研究書などを閲覧したり借りたりできました。書店では絶版になってい

る本や雑誌のバックナンバーは、図書館に行けば読むことができると知ったのもこの頃です。図書館というのは、買うほどではないけれども一回だけ読んでもおきたい本や、一部分だけ読みたい本だけを借りに行くだけの所ではなくて、図書館を通してしか読めない本を読む機会を与えてくれる場所だということが分かったのです。二松学舎大学の図書館にはそのような貴重な本がたくさんあり、二松の学生は幸せだと思います。

大学の卒論や大学院のレポートや修士論文、博士論文を書くようになってからは、図書館なしには研究ができないほどに図書館にお世話になっています。特に、自分が取り上げたテーマについて、他の研究者がどのような研究をして、どのようなことを考えているのかを読み、それを踏まえて自分のレポートを書くことはとても大切で、図書館の研究書や学術論文の紀要などは、とてもありがたいだけではなく、刺激を与えてくれるものでした。

私が図書館で勉強することを覚えたのはかなり遅くなってからで、英国に留学した時です。禁帯出の大辞典や哲学書をたくさん読みました。英国に留学していた時には、寮がキャンパスの中にあり、図書館まで歩いて30秒、自分の部屋の窓から図書館が見えるほど近く、図書館は夜の11時まで開いていましたから、夕食の後、昼間の続きを読んだり、シェイクスピア演習で来週読む劇のビデオを見るために図書館に戻ることもしばしばでした。

二松学舎大学に勤めてからも、大学の図書館ではたくさん、読みたい本を読ませていただいています。海外研修の機会をいただいた時にはケンブリッジ大学の図書館で本を借りたり、すべての本が禁帯出の図書館（貸し出ししないので、いつでもすべての本が読める！）で研究したりしています。図書館は私にとって、楽しみも研究の素材も与えてくださる、なくてはならない大切な場所です。感謝！

「広がる」特別な空間 ―私と図書館

文学部国文学科 教授 原 由来恵

「図書館」と聞いたとき、皆さんはどこの「図書館」を思い出し、どのようなイメージを持つのだろう。「図書館」の使い方は人それぞれ、利用者の数だけ図書館への思いがあるのかもしれない。私にとっての「図書館」は昔も今も世界が「広がる」特別な空間である。

知らない領域が載る書籍や新刊との出会いは本屋にもある。しかし本を読んでいてふと何かを思った時、図書館にはそれを熟考する静謐な時間や分からないことを即座に調べる手段が揃っている。勿論、研究室や自宅の書庫で類似する時間を過ごすことはできる。けれど残念ながら図書館での調査の広がりを実感することはできない。「図書館」では素朴な疑問から調べたことが連鎖反応をおこし、考えが幾重にも構築され一つの発見に変わり、気が付けばいつのまにか本を開いた時よりもずっと大きな世界が広がっている。

しかし図書館が与えてくれる広がりへのチャンスは研究や読書することからだけではない。きっかけは宿題や課題、次の時間までに何となく立ち寄った時ですら、いつもノートや思考、人の縁といった様々な世界を広げて繋ぐ特別な空間を提供してくれる。

二松学舎大学での学生時代、時間が急に空いたので散歩がてら国会図書館まで行ってみた。はじ

めは講義で聞いた写本を見てみたいという、今思うと本当に恥ずかしい「知らない強さ」全開の軽い気持ちだったが、それが大きな出会いとなった。司書の方に教えて頂きながら出会った『伊勢物語』や『枕草子』。そこに書かれた繊細で優美な仮名文字と布目模様の紙「布目紙」を目の当たりにし、そこに息づく古典のリアルを身近に感じるとともに、この時の経験が今日をかたちづくる要因の一つとなった。その後、本学の図書館にも写本や複製本、版本があることを知り、先生にお願いして見せて頂いた。そして大学院へ進学後、今もある神田の古書店を覗いたときに『枕草子春曙抄』の版本を見つけた。その時は当然、その場ですぐに購入できるお金も無く、そこから動けずにいたら店主が話しかけて下さり、二松学舎の院生であること、欲しいが支払いに少し時間がかかることを正直に告げると、支払いを待って下さった。これは時代や神田古本屋街の学生を育てる風土からでもあるが、ご主人ははっきりと本学の図書館や当時の本学教職員への信頼と仰っていたことが忘れられない。

「図書館」は知識・思考・出会い・未来が広がる特別な空間。あの時の版本は現在の礎の一つであり今でも大切な宝物である。



家蔵本『枕草子春曙抄』

二松学舎創立145周年記念企画展

大学資料展示室

本学は今年創立 145 周年を迎え、大学資料展示室では、「創立 145 周年記念」を冠した 3 回の企画展を計画しました。次号と 2 回に分けて紹介します。

「新収コレクション」展

2022年7月15日～9月17日



「正岡子規宛 夏目漱石書簡（明治 24 年）」

直近の 5 年間で収集した資料の中から、創立者・三島中洲の書幅、中洲の師である山田方谷や斎藤拙堂の書幅、正岡子規宛の夏目漱石書簡、渋沢栄一の傘寿を祝い本学関係者が贈った『頌壽帖』、芥川龍之介の自筆草稿、軽井沢南原の別荘に秘蔵されていた横溝正史の自筆原稿、モーリス・ルブラン原作「アルセーヌ・ルパンシリーズ」翻訳者の保篠辰緒旧蔵資料など 42 点を展示しました。

大学資料展示室では、今後も創立者や本学に関する資料を中心に収集し、公開していきます。

「三島中洲と近代 其八 一新収の小野家旧蔵資料」展

2022年10月6日～11月26日



三島中洲「六言成句屏風(六曲一双)」大正 3 (1914) 年

2019 年に三島中洲の母方の小野家に保管されていた資料が、本学に寄贈されました。資料の内容は、三島中洲の小野家宛書簡、中洲宛の諸家書簡、小野家旧蔵の中洲の書等です。今回の展示品の目玉として中洲の揮毫による「六言成句屏風（六曲一双）」(写真)があります。「八十五翁」印が捺されていることから、中洲 85 歳の書、大正 3 (1914) 年の揮毫にかかるものと分かります。屏風の他は中洲、入江為守、依田学海、渋沢栄一の書簡等 21 点展示しました。

また、2022 年 10 月 17 日～11 月 26 日の間、電気通信大学の佐藤賢一教授による講演「小野光右衛門以正について 一村役人と和算家の姿」と本学文学部の町泉寿郎教授による展示資料解説「三島中洲と近代 其八 一新収の小野家旧蔵資料」をオンデマンド配信しました。

竹清馬越文庫のデジタル化画像の利用について

国文学研究資料館（人間文化研究機構）では、2014年度より、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画（歴史的典籍NW事業）」に基づいて、国内外の古典籍（奈良時代以降、江戸時代末までに日本人によって著述された書物）のデータベース化を進めてきました。

二松学舎大学もこのプロジェクトに参加することとなり、今年度、国文学研究資料館が提供する「新日本古典籍総合データベース」に本学が所蔵する貴重資料「竹清馬越文庫」の内、158点のデジタル化画像を公開しました。今後、2年間でさらに326点のデジタル化画像を公開する予定です。

竹清馬越文庫とは？

竹清馬越文庫は、二松学舎の卒業生で、のちに二松学舎の顧問を務めた弁護士^{まこしおうすけ}の馬越旺輔（1894？～1980）から寄贈された三村竹清の旧蔵書で、江戸時代の貴重な写本・版本約2,500冊が収蔵されています。

^{みむらちくせい}三村竹清（1876～1953、本名・清三郎）は、東京の京橋で生まれた書誌学者です。蔵書家としても知られ、考古趣味の会^{しゅうこかい}「集古会」の幹事として雑誌『集古』を編集する一方で、稀書複製会に属して善本や稀観書の保存と普及に努めました。

国文学研究資料館が提供する

新日本古典籍総合データベース(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>)



「書誌から探す」を選択し、キーワードに「竹清」と入力して検索してみます。



画像のアイコンが表示されているものが、デジタル化画像が公開されている資料です。クリックすると画像が表示されます。



右下に利用条件が表示されていますので、利用したい場合は、事前に確認してください。

田端文学散歩

「東京府下豊島郡滝野川町字田端は、明治の末には一面の畑であり、何の変哲もない田舎町にすぎなかった。・・・芥川龍之介一家が移ってくるに及んで、田端は俄かに文士村と化し、作家の往来が目立った。・・・そして龍之介を囲繞する文士文人群と美術家群との間に、大正期特有の人情豊かな濃密な交流がはじまった。」※¹

JR 田端駅南口を出ると、右手に「不動坂」①という階段があります。昔は舗装されていない急な坂道で、芥川龍之介（1892～1927）は「たゞ厄介なのは田端の停留所へゆくのに可成急な坂がある事だ・・・だから雨のふるときには足駄で下りるのは大分難渋だ　そこで雨のふるときには一寸学校が休みたくなる」※²と、旧制第一高等学校時代の親友・井川恭（のちの恒藤恭）（1888～1967）への手紙（1914年11月30日付）に書いています。

坂を上り、少し歩いた先の十字路を右折し、さらに少し行くと「芥川龍之介旧居跡」②があります。芥川が内藤新宿町（現・新宿2丁目）から田端に移ったのは1914年10月末のことで、東京帝国大学に通う22歳の学生でした。芥川の代表作『羅生門』や『河童』もこの地で誕生しています。現在、この旧居跡の敷地の一部に「（仮称）芥川龍之介記念館」を開設する計画が北区によって進められています。駅を背にして南に向かう坂を下りると、1918年に芥川が塚本文との結婚披露宴を催した料亭「天然自笑軒」跡③があります。

「天然自笑軒」跡が面する道を西に歩き、国道458号線を渡ると「東覚寺」④の参道に出ます。この寺の「赤紙仁王」と呼ばれる石造金剛力士立像には、患部と同じところに赤紙を貼って病気の身代わりを祈願する風習があり、現在も多くの人を訪れています。境内には江戸後期の狂歌師で戯作者の蜀山人（大田南畝 1749～1823）の歌碑があります。

「東覚寺」を出て458号線を南に進み、谷田橋交差点を右折します。「谷田川通り」⑦と呼ばれるこの通り沿いには、詩人の萩原朔太郎（1886～1942）、評論家の小林秀雄（1902～1983）、画家で詩人の竹久夢二（1884～1934）らが住んでいました。

「谷田川通り」に入り2つ目の信号側にはかつて不動坂下に祀られていた「田端不動尊」が遷座されています。ここを右折し、「赤紙仁王通り」を経て「ポブラ坂」⑤を上った場所には、かつて、画家で歌人



の小杉放菴（1881～1964）が作ったテニスコート「ポプラ倶楽部」があり、芸術家や文士たちの社交場となっていました。

「ポプラ倶楽部」跡を「田端高台通り」に向かい北に進むと「室生犀星旧居跡」⑥があります。1916年に田端に転居し、以降田端内を5回転居した室生犀星ですが、この場所が気に入り、最も長い年を過ごしました。少し離れた「北区立童橋公園」の一角には旧居にあった庭石⑦が残されています。

「室生犀星旧居跡」から北へ進むと詩人で作家のサトウハチロー（1903～1973）旧居跡⑧があります。1920年から2年間、詩人で評論家の福士幸次郎（1889～1946）宅に同居していました。

田端駅北口方面に向かうと「田端文士村記念館」⑨が現れます。今回紹介した作家や芸術家をはじめ、田端に住んだ文士たちの原稿や書簡など、さまざまな資料をみることができます（入館無料）。

今回のコースからは少し外れますが、「大龍寺」⑩には、35歳の若さで亡くなった正岡子規（1867～1902）の墓があります。

また、少し距離はありますが、巣鴨の慈眼寺には芥川の墓がありますので、足を延ばしてはいかがでしょうか。

※1 『文壇資料田端文士村』 近藤富枝著
講談社 1975年刊

※2 『芥川龍之介全集 第17巻』
岩波書店 1997年刊



作家のおやつ巡り⑤

『裸の王様』で芥川賞を受賞した開高健（1930～1989）は、ベトナム戦争の取材など行動派の作家として、また、釣り好きな作家としても知られています。開高は小笠原諸島へ釣りに出かけた際、いろいろなメーカーの缶詰の「ミツマメ」を持ち込んだそうです。食べ比べたところ、「傑出していた」と絶賛したのが、榮太樓の「みつ豆」でした。北海道産小豆、沖縄県産黒糖を使用した黒みつと、寒天・フルーツとの相性は抜群で、開高は「精妙な味覚と色感と舌触のアンサンブル」と表現しています。

榮太樓は、菓子商をしていた細田徳兵衛が文政元（1818）年に九段坂に構えた「井筒屋」が始まりとのこと。本学への通学路、九段下から九段上までのどの辺りにあったのか想像しながら九段坂を歩いてみてはいかがでしょうか。

現在、榮太樓の本店は、東京・日本橋に店を構えています。

【参考資料】

- ・開高健著「亜熱帯夜を噛みしめる、ビーフ・ジャーキー」（『生物としての静物』所収 河出書房新社 2022年刊）
- ・「榮太樓の200年史」<https://www.eitaro.com/200th/history/>（参照 2022/8/23）



本学教職員著書紹介

『「取り付け」の研究： 平成金融危機から中央銀行デジタル通貨時代まで』

西畑 一哉 著
(勁草書房、2022 年 5 月 10 日発行)
A5 判 160 頁・2,700 円＋税
ISBN：978-4-326-50493-0



経営が悪化した銀行において、預金者が集団で、われ先に預金を引き下ろし現金を手に入れようとする行動を「取り付け」といいます。本書では「取り付け」の様々なケースを取り上げて、「取り付け」に関する法則性を探り、併せて対処策を検討しています。「取り付け」は不思議な現象です。ある時点で突然事態が急変し、猛烈なスピードで進行します。「取り付け」に参加している人々は別に誰かに教わったわけではないのに、主体的にかつ集団的に加わっています。

かつて平成金融危機の「魔の 11 月 12 月」と呼ばれた 1997 年 11 月 12 日に、北海道拓殖銀行や山一證券といった巨大金融機関の破綻が契機となり、全国的な「取り付け」が発生しました。経営に問題がある金融機関のみならず、健全な銀行にも「取り付け」が及び、全国に波及しました。当時、政府の方針で預金の全額保護が預金保険法で法定されており、いかに多額の預金をしていても全額支払うことを銀行に代わって政府が保証していたのです。にも関わらず、システミックな「取り付け」が発生しました。それは何故なのか、「取り付け」が広範囲に発生した原因について、探ってみようとしたのがこの本のテーマです。

その他、女子高生の噂が基で「取り付け」が発生した豊川信金事件、インターネットでのデマが原因だった佐賀銀行事件、怪我人が出るなど大混乱を引き起こした木津信用組合事件、など内外の「取り付け」事案を取り上げ分析しています。

なお、通貨の変遷には、製紙技術や印刷技術など、その時代その時代の技術革新が深く影響していますが、インターネットと暗号化の技術で、中央銀行デジタル通貨が発行され、広範に流通する世界が徐々に近づいています。スマートフォンの中に、日本銀行がデジタル円を挿入し、現金として使えるようになるという中央銀行デジタル通貨が日本においても既に実験段階に入っています。そうした時代における「取り付け」＝“Digital Bank Run” がどのような形で生じるかを想定し、預金の引き出し制限を設けるという対処策も示しました。その際、イタリアにおいては、現時点でも事実上 1 人 1 日当たり 1000 ユーロ（約 13 万円）の預金引き出し＝現金使用しか認められていない事実を援用しています。

本書は、他に類例を見ない経済現象＝「取り付け」を論じた初めての書物です。

学校法人二松学舎 常任理事 西畑一哉

編集後記

「季報」114 号をお届けします。

今号では大学資料展示室企画展の様子や、本学が所蔵している「竹清馬越文庫」資料のデジタル化画像の利用に関する記事などを掲載しています。また、田端周辺の文学散歩も紹介しています。秋のお散歩にいかがでしょうか。

ぜひご一読ください。

(S・A)

二松学舎大学附属図書館

季 報

第 114 号

発行日 2022 年 11 月 25 日

発 行 二松学舎大学附属図書館

九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

電話：03-3263-6364

柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井 2590

電話：04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ